

# 相対的剥奪の実証研究 —ネパールにおける階層と剥奪—

○関西学院大学

中野康人

## 1. 報告の目的

相対的剥奪という概念は、絶対的な状態ではなく、ある参照点からの位置づけによって生じる相対的な充足・剥奪感で、人々の態度や関係を説明しうる概念として使われてきた。Smith&Ortiz(2002)は、剥奪の参照元と参照先のレベルの違いにより、異なるタイプの相対的剥奪が存在するとしている。つまり、個人を参照するのか、それともなんらかの集団を参照するのかによって、相対的剥奪が個人的なものなのか集団的なものなのかが変わってくるという考え方である。本報告では、異なるタイプの相対的剥奪が個人の満足感や幸福感にもたらす影響を調査票調査の結果に基づいて論じる。

## 2. 使用するデータ

本報告で使用するデータは、2013年3月に Kirtipur(Nepal) で実施した調査票調査にもとづくものである。Nepal 社会は、多様な民族や宗教が混在している。公式には「平等」が宣言されているが、ヒンドゥー教にもとづく身分制度カーストが、仏教などの他宗教や複数の民族をその階層システムの中に包摂し、Nepal 社会の階層構造を規定してきた。相対的剥奪は、剥奪感を感じる参照点が重要である。特に集団レベルでの剥奪を考える場合、明確に認知される社会集団の存在が欠かせない。カースト制度がある社会は、その是非はともかくとして、相対的剥奪が可視化されやすい社会といえるだろう。

調査地点の Kirtipur 市は、Nepal の首都 Kathmandu 南郊にあり、伝統的なネワール族の集落を中心とした自治体である。また、市内には Tribhuvan 大学のキャンパスがあり、大学関係者や Kathmandu 盆地に流入してきた新住民のコミュニティも存在する。この調査では、ネワール中心のコミュニティと非ネワールのコミュニティ、古くからあるコミュニティと新興コミュニティを抽出し、各コミュニティごとに選挙人名簿にもとづいた無作為抽出を行った。実査にあたっては、Tribhuvan 大学の Nepal 大学院生とともに対象者宅を訪問し、他記式の面接調査を行った。計画標本は 527 名で、有効回収票は 302 票（回収率 57.3%）であった。

## 3. 結果

調査対象者には、自分自身と自分が属するカーストグループ、そして高カーストと低カーストのグループそれぞれについて、現在と過去と未来と理想の「状態」を 0 から 10 の物差で評価してもらった。ある参照元からある参照先の評価を引いた値が、相対的な評価となり、その値が負であれば相対的剥奪となる。例えば、自分自身の現在と過去の相対的剥奪、自分自身の現在と理想の相対的剥奪、自分自身の現在と自分が属するカーストグループの現在や理想との相対的剥奪、自分自身と他カーストグループとの相対的剥奪、などが定義できる。これらの異なるタイプの相対的剥奪と、社会に対する満足感や幸福感との関係を分析したところ参照点の違いにより満足度や幸福度との関係に違いが見られた。自分自身の現在と過去を比較する個人的レベルの剥奪は満足感や幸福感との関係はないが、自分自身と自分が属するグループの現在との差や、自分が属するグループの理想との差は不満足に関係している。